

就労支援サービスの支援力向上のための研修

一般社団法人 サステイナブル・サポート

〒500-8175 岐阜県岐阜市長住町 2 丁目 7 番 アーバンフロントビル 3 階

助成事業の概要

精神障害や発達障害のある人、若者や多様な働きづらさのある人の就労支援に従事する事業所の職員が、支援技術向上、業務関連知識向上、周辺領域知識向上を目標、支援に活かすことを目的として、おおむね月 1 回 (年 12 回) 開催した。

2022 年 4 月：事例検討会 (いかわクリニック 井川典克氏)

5 月：障害者虐待防止・権利擁護 (サテライトクロス 絹谷栄策氏)

6 月：障害者施策の歴史・制度の全体像 (相談室あめあがり 太田隆康氏)

7 月：支援の基本スタンス (相談室あめあがり 太田隆康氏)

8 月：日本のジェンダーギャップを考える～就労支援の現場から～ (株 WillLab 小安美和氏)

9 月：障害福祉の基礎理解 (一般社団法人 KOTONASU 前島隆一氏)

10 月：日本財団 WORK ! DIVERSITY プロジェクトとモデル事業について

(一般社団法人ダイバーシティ就労支援機構 代表理事岩田克彦氏)

11 月：障害者雇用の基礎理解 (一般社団法人 KOTONASU 前島隆一氏)

12 月：障害者支援基礎 (1) (一般社団法人 KOTONASU 前島隆一氏)

2023 年 2 月：あらためて学ぶ発達障害 (いかわクリニック 井川典克氏)

2 月：障害者支援基礎 (2) (一般社団法人 KOTONASU 前島隆一氏)

3 月：病気と生きづらさに向き合って働くということ

(一般社団法人 仕事と治療の両立支援ネットワークブリッジ 服部文氏)

事業の成果

一般社団法人サステイナブル・サポートは設立 8 年目となり、設立当時にはなかった「若者や多様な働きづらさのある人の就労支援事業」「データワークによる若者の雇用創出事業」「保護猫カフェ B 型事業所」など、この 1 年でも急速に活動の幅を広げ続けている。

上記の通り、活動の幅を広げている理由として、支援が届きにくい対象者が幅広く存在する事が挙げられる。困り事があっても声を上げにくい、助けを周りに求めにくい、また、どこに、誰に相談をしていいのか分からず一人で抱え込んでしまう対象者への支援をする為、職員一団となって新しい知識の吸収と支援の再確認に努めた。

現在当法人には多くの職員が勤務しているが、福祉分野出身と一般企業出身の二極となっており、職員自身の知識の差が課題点であった。

そこで今年度は職員研修に対するチームを作り、そのチームが中心となって職員研修の内容について検討した。就労支援の基本、ジェンダーギャップ、がんや難病との両立支援など、基礎から幅広いテーマまでを取り上げた。研修後、小グループに分かれて意見交換し、職員それぞれの知識の共有に力を入れた。

5 月に実施した「障害者虐待防止・権利擁護」

では個人ワークにて虐待と思われる項目のチェックシートに取り組み、その後グループセッションにて自分以外の意見を聞くことで改めて虐待とはなにか、なにをしなければいけないのかを考えるきっかけとなった。

8月・10月・2月・3月には、地域支援者向けの公開研修会を実施し、他の支援機関からも多くの参加者があった。支援者としての経験値にかかわらず、すべての参加者にとって知識の吸収と再確認ができる機会となった。当団体の職員に限らず、より多くの支援者に研修の機会を設けられたことは有意義であった。

当団体が運営している就労移行支援事業所ノックス岐阜では、2022年、一般企業への就職者数が過去最多の16名となった。他の事業でも利用者（支援対象者）が着実に増えており、研修の成果を実感している。

成果の広報・公表

当団体が発行する会報誌「SS JOURNAL」を関係機関に発送、メールマガジンに掲載し、約800名の読者に向けて公開研修の必要性や意義について広報活動を行った。また、現在の情報収集のツールとして使用者の多いSNSでも発信を行った。Facebook、Twitter、Instagram等幅広い年齢層や全国への発信を行い、ネットからの申込みも増加した。オンラインでの研修では、遠方からの参加者もあり、より広域に情報を届けることができた。

今後も、年間の研修を通じた報告書を作成・印刷、電子ファイル(PDF)も発行し、当団体の各事業部別に設置するとともに、地域の支援機関に配布し、引き続き、地域全体の知識と支援の向上を目指していきたいと考えている。

今後の展開

当団体は「働きたいけれどうまくいかない」「人と関わることが不安」という、さまざまな理由で働くことに不安がある人の支援を行っている。働きづらさの理由は、ニートやひきこもり、グレーゾーン、がんサバイバーや難病患者、LGBTQ、刑余者等、千差万別である。支援者として、支援対象者の抱える困難を理解し、課題を共に考え、寄り添っていくことが大切だと考えている。

支援者としての知識や技量を高めるために、昨年度に引き続き、研修に参加した職員は全員に感想を提出することとした。職員は、内容を再確認し、自分の知識に深く落とし込むよう努めた。研修映像を記録し、資料をデータ管理することで、今後入職する職員が知識をつけることができ、既存の職員も改めて内容を確認することが容易できると考えている。

今後も様々な視点からの職員研修を継続し、支援者としての力を十分に発揮できるように職員全員の意識を高めていきたい。